

# 草薙ゼミナール

## 2000年度 卒業論文集

2001年3月

大阪経済大学 経営情報学部

経営情報学科

指導教員：草薙 信照

# 草薙ゼミナール 2000年度 卒業論文集

## 【総目次】

指導教員 草薙 信照 2000年度卒業論文集の刊行に寄せて

### 情報と社会に関する研究

- |        |       |                               |
|--------|-------|-------------------------------|
| 975006 | 伊藤 和人 | インターネット利用による環境負荷低減の効果に関する研究   |
| 975020 | 大橋 茂樹 | 自動認識技術の動向 ~情報セキュリティと生体認証を考える~ |
| 975022 | 岡村 陽子 | インターネット利用に伴う学生の就職活動の変化        |
| 975053 | 田端 良基 | 近未来における携帯電話の社会的役割に関する考察       |
| 975060 | 奈良 美幸 | 放送のデジタル化に伴うインターネットとテレビの役割の変化  |
| 975064 | 灰方 良介 | 西暦2000年問題のその後について             |
| 975273 | 江口 泰弘 | インターネットを利用した音楽配信ビジネスの可能性      |
| 975347 | 牧 伸也  | IT時代における TRON の役割             |
| 975385 | 土田 道寛 | インターネット ビジネス モデルに関する考察        |
| 995956 | 檜 佳何  | インターネットによる高齢者への福祉と社会進出支援      |

### 社会問題全般に関する研究

- |        |        |                                |
|--------|--------|--------------------------------|
| 975085 | 松吉 秀浩  | 学生の視点から見た大学教育への提言 ~大学淘汰時代に向けて~ |
| 975095 | 村田 知子  | 湖西線の開通が湖東および湖西の経済発展に及ぼした影響について |
| 975141 | 小野 耕平  | 中央競馬における観客動員数減少の実態と対策          |
| 995954 | 鈴木 佐知子 | アニマルセラピーによる「心の癒し」効果に関する考察      |

### 応用システムの設計・開発

- |        |       |  |
|--------|-------|--|
| 975075 | 藤原 孝通 | Web環境における計量経済モデル分析システムの設計と構築                   |
| 975089 | 三角 周平 | JaMaPS とアドレスマッチングによる地理情報の発信と特定                 |
| 975104 | 渡辺 孝行 | Web-QSS を発展させた DSS の設計と構築                      |
| 975118 | 井上 綾祐 | 地域分析におけるリモートセンシング データ利用の可能性                    |
| 975148 | 神垣 裕介 | 地域計画における VRML の利用可能性<br>~ Web 上での 3D 大学空間の実現 ~ |

### 作品制作

- |        |        |                                |
|--------|--------|--------------------------------|
| 975008 | 井上 寛之  | 3DCG 映像制作 「海」                  |
| 975055 | 坪井 美智子 | アニメーション制作 「私的解釈に基づく小倉百人一首の視覚化」 |

## 「2000年度卒業論文集の刊行に寄せて」

2001年3月

指導教員 草薙 信照

草薙ゼミの第3期生となる諸君は、21世紀最初の、そして「経営情報学部・経営情報学科」としても第一期生となる卒業生である。さらに、1997年4月に本学へ着任した私にとっては、多くのゼミ生は同期生であるなど、いろいろな意味で特別に思い入れの深いゼミであった。

草薙ゼミとして「インターネットを利用した応用情報システムの研究」という看板を掲げて募集を行ったのが1998年の10月、例年ならばこのテーマを見て集まった諸君！ということになるのだが、このときばかりは事情が違った。集まった顔ぶれのほとんどは「見なれた顔」で、メンバーの過半数が「TA」であるなど、まさに世紀末を飾るにふさわしい(否、新世紀を迎えるにふさわしい)異例尽くめのゼミであったと思う。運悪く紛れ込んだ一般学生たちの戸惑いは、如何ばかりであっただろうか。

さて、卒業論文の総評である。今年度のテーマを見渡すと、実に多方面の領域に広がっている。これはそのまま、このメンバーが個性派ぞろいであったことの表われであるといえそうである。例年どおり、情報と社会に関する研究を中心としながらも、社会問題分野では大学教育からアニマルセラピー、応用システム開発分野では計量経済からリモートセンシングやVRMLまで揃っており、期待以上に見事な出来栄となった作品制作も2点ある。

このような多様性は、各人が各領域において強い問題意識を持って取り組んだものであり、いずれも私の知的好奇心をくすぐるに十分なものであった！このような多岐にわたるテーマについて諸君と一緒に考え議論する機会を得られたことは、私にとっても貴重な経験であり、そういう意味でも諸君には感謝している。

毎年、完成した後だからこそ言うことであるが、卒業論文の意義として私がもっとも重要だと考えることは、諸君にとって、1つのテーマについてこれほど真剣に取り組んで研究するなどということはおそらく初めての経験であろう、という点である。したがって、一生懸命になって取り組んだという姿勢がひしひしと伝わってくれば、たとえその論文がドタバタのうちに仕上げたものであっても、考えていたことの半分しか言い表せていなくても、あるいは全体の半分以上が文献からの引用であったとしても、何物にも替え難い貴重な成果である、と言って良いだろう。個々の論文の評価は、研究者本人である学生諸君、そして読者の方々に委ねたいと思う。

今はどちらかといえば「なんでこんなしんどいことを...」という思いのほうが強いだろうが、これに耐えたという経験は、必ずや仕事における自信につながるであろう。そして10年後あるいは20年後になれば、良き思い出として懐かしく鮮やかによみがえるに違いない。

最後になるが、今後は同じ社会人として対等に、あるいは逆に私を導いてくれるようなつきあいをしていけるならば、これにまさる幸せはないと思う。今後の諸君の健闘を期待する。